



### 聖ヨセフとわたし

聖ヨセフ年(今年12月8日まで)を記念し、霊名がヨセフの司牧者に聖ヨセフにちなんだものの紹介や個人的な気づきをシェアしていただく。

### 聖ヨセフに想う

聖ヨセフは沈黙の聖人と言われています。彼は聖家族を守り、聖母と共に神の子イエスを養育するという使命を黙々と忠実に果たしていきました。そこには余計なおしゃべりはありません。

聖ヨセフの生き方には沈黙のもつ重み、沈黙のもつ真実が表れています。このような聖ヨセフの姿は、現代の私たちにとって大切なことを示しているように思います。

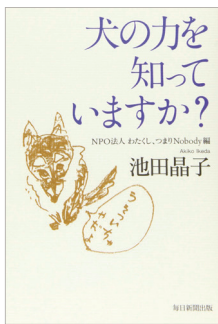
現代は言葉の時代です。自分の主張や考えを声高に叫び、効果的なパフォーマンスをしないと周囲から後れを取ってしまうと考える人が多いようです。沈黙の持つ重み、沈黙が与えてくれる平和と静けさは、今日の私たちが忘れていく大切な心のあり方ではないでしょうか。

聖ヨセフは沈黙のうちに神のみ旨を悟り、神の摂理にすべてを任せて生きました。変化の多い、忙しい現代社会に生きる私たちの心は、絶えず喧騒に包まれています。聖ヨセフは、現代人が忘れてしまった沈黙の価値を私たちに教えているのではないのでしょうか。



鈴木英史神父 (サレジオ会)

『犬の力を知っていますか?』(池田晶子著、毎日新聞出版、2015年、税込1760円)



松永敦神父からこの一冊

司牧者がリレー形式で若者たちに読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は松永敦神父様(兵庫教会)が担当。



今年の4月から中学生に宗教を教えることになりました。授業に取り入れようと、文筆家、池田晶子の『14歳からの哲学』を探しに学校の図書室へ行きました。お目当ての本の近くにあったのが、ご紹介する本です。

「彼は死んだ。私のために生まれてきて、私のために死んだ。それなら、どうしていまさら私と彼とが別々になることなんかあるだろう。」

犬は、神様が、人のために創った生きものである。……老いて疲れた犬の衣を脱ぎ捨てた彼が、いまもこの傍らに、私のそばに、優しく寄り添っていること、私は信じている。本当に、ありがとうございます。(67頁)。

た。だからといって、犬好きにしか面白く読めないことはありません。この本は池田の死後、夫が設立したNPO法人によって編集されたエッセイ集です。他の池田の著作がそうであるように、哲学的な内容が多分に含まれています。宗教に関心のある方であれば、面白く読めると思います。冒頭の引用は最も心に響いた箇所です。なぜ響いたのでしょうか。その理由は、彼女が「本当に」思っ

て、心から出た言葉だからです。心から出た言葉は読者の心に直接届きます。文中の「彼」や「犬」を「大切な人」に置き換えると、そのことが納得できると思います。

私の紹介文よりも彼女の言葉そのものに触れて欲しいので、もう一か所、引用させていただいて終わりたいと思います。

「人生の一回性、喜びも悲しみも、一回きりの経験

である。……このことを人はわかつている。……だからこそ人は、過ぎてゆかないものを求める。過ぎてゆかないもの、過ぎてゆくけれども巡るもの、を求めて、見出し、嬉しいのである。……一回性における永遠性、永遠の循環性を見出す時、人は、自分が自分の人生を生きていることの奇跡をも知るはずである」(280頁)。

次回は、矢野吉久神父様(箕面教会)です。



### 「信仰の時間」

ABCラジオ(朝日放送) 毎週日曜日 5:50~6:00AM

6月担当: Sr吉住映利子 (梅田ブロック協力)

### 向こう岸に渡ろう

(20日放送分より)



年間第12主日のミサで読まれるマルコ福音書4・35~41を深めて行きましょう。

——その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかしイエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常

に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った——。

この福音書の箇所は、湖の上でイエスが嵐を鎮めたという、じつに簡潔な話です。ここに語られた記録が、たんなる報告事項や昔話なら、さして興味深いとは言えない場面かもしれません。しかしこのできごとは、私たちの物語です。だから興味深いのです。ではこのできごとは、今を生きる私にとって、どのような意味があるのでしょうか。

この嵐を鎮める奇跡のすぐ前に、イエスは、神の国のたとえ話を群衆に話しました。有名なからし種のたとえです。してみると、神の国のたとえと、嵐を鎮める奇跡の間には、何か深い関係がありそうです。

聖地巡礼で、ガリラヤ湖にいらし

た方は経験なさったかも知れません。この湖は、天候がよく変わるそうです。晴れているかと思うと突然雲が湧いて大雨と大風が起こります。かと思うと急に天候が回復して凪になります。イエスが湖に「黙れ、静まれ」と叱ると、すぐに天候が回復したと書かれています。それは、たんなる偶然だと言う人がいます。そうかも知れません。しかし、いくら科学が発達していない大昔でも、偶然かもしれないのことは考えるでしょう。であれば、わざわざ福音書にそんなできごとを記すのでしょうか。考えてみれば、イエスと一緒に船に乗り込んだ弟子たちは、プロの漁師です。湖のことは良く知っているはずでしょう。その弟子たちが恐れしました。これは普通の嵐じゃない。なのにイエス様は眠っている。「私たちが溺れてもかまわないのですか」と弟子たちはしつこくイエスを起こし不平をいいます。イエスは、たったふたつの言葉で嵐を鎮めた後、弟子たちを叱ります。「まだ信じないのか」。弟子たちは、イエスの力を信じたからこそ、イエスを起こしたとも考えられます。それなのにイエスから不信仰を叱られ

ます。なぜでしょうか。弟子たちは、信仰のところでイエスを起こしたのではなかったと思います。恐れと苛立ちです。ではもし信仰があるなら、この場合、どうすべきでしょうか。ただ漕ぎ続けること、水をかい出しながら陸に向かってひたすら漕ぐことだと思えます。イエスは、ご自分の身を弟子たちに委ねていました。だから眠っておられたのです。弟子たちの使命は、イエスを陸に運ぶことでした。だから何があっても、恐れを感じても、み旨を信じてその使命を果たすことであると思います。

キリストの弟子になった私たちも、何が起ころうと、神の守りを信じて恐れずに、神から託された使命を果たすことが大切です。その使命とは、イエス様がそうしたように、人びとの幸せのために尽くすことではないでしょうか。そのように尽くすことこそが、イエスが示してくださる神の国の姿です。からし種ほどであってもかまいません。イエスと同じ心をもっていれば自然と大きく成長していく。イエスは、そのように教えてくださっています。イエスと同じ心で歩んでまいりましょう。